

第6回(2012. 8. 5 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

高天原と葦原中国

神話などでは「高天原(たかまがはら)」とか「葦原中国(あしはらのなかつくに)」という言葉がよく登場します。子供のころから神話に親しんできた人には、この違いはわかると思いますが、なかには高天原のなかに葦原中国があると言った人も少なくありません。それ以上突っ込んで聞いてみても、「神さまの住んでいるところで、われわれとは関係ないところだから知っている必要がどこにある」と聞き直られる始末ですが、そう言わないで、もう少しだけおさらいしてみましよう。

「高天原」は天上界を指し、アマテラスオオミカミ(天照大御神/天照大神)など天津神(あまつかみ:天界の神)が住んでいました。「葦原中国」は、高天原と黄泉国(よみのくに)の間に存在する世界で、通常は日本の国土を指し、オオクニヌシノミコト(大国主命)などの国津神(くにつかみ:地上界の神)がいたということになっています。葦原中国は出雲地方を指すという説や、奈良県の橿原あたりだという説、また邪馬台国論争とからめて、高天原を九州、葦原中国は畿内という説など諸説ありますが定かではありません。

天上界のアマテラスオオミカミは、地上に正当な統治者を送り込むことになり、孫のニニギノミコト(邇邇芸命/瓊瓊杵尊)天下ってきます。これが天孫降臨(※1)とか国譲りとか言われる神話です。アマテラスは高天原を治めていたと言いますが、高天原とはどこか諸説があります。天上界であるという説がこれまで一般的でした。しかし、最近は高天原地上界説が盛んで、それは卑弥呼や邪馬台国論争と相まって、大和朝廷の成立過程と大きく関係するからでしょう。

この地上説の中には高天原外国説があります。新井白石は、タカマガハラを「高海原」と書いて南海の島々の民族だと言っています。後には南海説が飛躍して、ムー帝国説やアトランティス大陸説まで飛びだしてきました。浦島太郎の竜宮城がまさに南海の高天原だと言う人もいます。また、元禄3年(1690)に来日したドイツ人医師エンゲルベルト・ケンペルという人は、高天原は古代オリエント(中東)(※2)のバビロニアだろうと言っています。それ以降にも、紀元前2000年以上昔に栄えたアッカド王朝だったと考えた人や、エジプトであると言った人もいました。

モーセはエジプトからユダヤ族などヘブライ12部族を連れて、神から約束された「カナンの地」(現イスラエル)を見下ろせる「モアブの丘」(ヨルダン)で120才の生涯を閉じますが、モーセは天空を駆ける舟に乗って日本に来て、583才で亡くなったという説があります。石川県押水町にある宝達山の三つ子塚古墳が、モーセの墓だと言われています。また、日本人の起源はシュメール人だという説もあります。それによると、メソポタミア文明発祥の地は遠く中東で、最初に文明を築いたシュメール人はアッカド人などに滅ぼされて、以後行方不明なのですが、シュメール人は日本に渡ってきたと言うのです。じつは、このシュメールという言葉は、本来は「スメル」と発音するのですが、天皇を「スメラミコト」と称しましたので、天皇が異国人であってはならないという理由から、あえてスメルではなくシュメールと読ませたとの説があり、このことが日本人シュメール説の根拠となっています。世の中はなんでも言うてみるものです。根拠は後から探せばいいのですからね。

(※1)天孫降臨

天上界のアマテラスは神々の合同会議を開いて地上界に正当な統治者を送り込むことになり、国譲りの使者として次男のアメノホヒノミコト(天之菩卑能命)を送りますが、オオクニヌシノミコト(大国主命)はアメノホヒを上手く籠絡してしまいます。そこで、アマテラスは次の使者としてアメノワカヒコ(天若日子)を送るのですが、これには娘のタカヒメノミコト(高比売命)を妻に差し出して釘付けにしてしまう。アマテラスは、アメノワカヒコに「どうなっているんだあ！」といって使者を送りますが、使者は矢で射られてしまい、アマテラスは雷神・剣神のタケミカヅチノオノカミ(建御雷之男神)と船神のアメトリフネノカミ(天鳥船神)を送り込んで、ようやく説得に成功しました。

こうしてアマテラスの孫のニニギノミコト(邇邇芸命/瓊瓊杵尊)が天下ってきます。アマテラスの孫が天下ってくるから「天孫降臨」とか「国譲り」とかいわれる神話なのですが、ニニギは、正式にはアメノニギシクニニギシアマツヒコヒコホノニニギノミコト(天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命)という長い名前の神さまです。

このときニニギノミコトに従った神の一人が「天の岩戸」事件の際にストリップまがいの踊りをして、驚いたアマテラスが隠れていた洞窟から顔を出したという踊りの上手なアメノウズメノミコト(天宇受売命)であり、地上界で道案内したのがサルタビコノミコト(猿田毘古神/猿田彦命)という道祖神信仰や庚申講信仰と結びつく地上神で、二神は後に結婚することになります。

この天孫降臨は、高級官僚の「天下り」という言葉の語源でもあります。そのスケールの壮大さは官僚の天下りとは比べものになりません。ひところ、高級官僚や公社・公団の幹部が数千万円もの退職金をも貰っていながら、いくつかの関連団体を回ってその都度、更に高額な退職金をもらっている現状を、新聞やテレビで報道されて大問題になりました。ただ、官僚のみんながそうだというわけでもないし、また公務員法にがんじがらめに縛られている現状で、もしも民間よりも給与が安くて、世間から公僕だけの税金泥棒などと陰口をたたかれて、しかも早くから退職させられても働くところがないようだったら、だれだって公務員なんかになろうとは思わないでしょう。テレビなどで高いギャラをもらって偉そうに喋りまくる評論家や、その尻馬に乗っかるキャスターと名乗るアナウンサーは、あたかも公務員は自分個人の召使いのごとく思っているやに見受けられ、また社会保険料や税金をごまかしたりしている人までもが、一様にテレビカメラの前で「私たちの税金で……」などと言っていますが、醜い人間の性を見せつけられている様で、情けない話ですね。貧乏人のひがみと言われるかもしれませんが、自分だけはそのようになりたくないと思うのです。

オオクニヌシは、因幡の白兔伝説にあるように、大変優しい神さまだと言われていますが、地上界の葦原中国をアマテラスに譲る際には、なかなかの力量を発揮しているようです。『古事記』では交換条件として新たな統治者と同規模な建物を要求したと言われています。つまり、領有権は譲るが祭祀権は譲らないとオオクニヌシは頑張ったのです。

出雲大社は、本殿の高さが24メートルありますが、2000年4月に昔の本殿を支えた巨大な柱の残骸が発掘されました。実際に私も見てきましたが、この柱は直系1m以上の丸太を3本束ねて1本の柱にしており、株式会社大林組がコンピュータで復元した結果、高さ30m、長さ109mで170段の階段が必要となることがわかり、現在の2倍の48メートルあったという伝承とほぼ一致することが判明しました。伝承に依れば、太古の時代では地上から屋根まで高さが100m近くあったとも言われています。出雲大社はバビロンの塔(ジグラット)に勝るとも劣らない空中神殿だったのです。高いところが好きなのは、山羊と何とかだと言ってバカにしている人は罰が当たりますよ。

それにしても古代人はどのようにしてこのような巨大な建物を建造したのか、その技術は未だにわかっていません。じつは、古代人は文明の進んだ星からやってきた宇宙人だったのですが、このことは、私が事故で頭を強打してしばらく入院していた脳神経外科の同室の人から聞かされた話です。

(※2)オリエントと中東

一般的に「中東」と言ったら、東はイラン高原から西はサハラ砂漠まで、北はカスピ海沿岸から南はアラビア半島までの広範囲にわたっていますが、この地方はもともとヨーロッパでは「オリエント」と呼ばれていました。オリエントとはラテン語の「オリエンス(昇る)」からきた言葉で、太陽が昇る方向すなわち「東方」を意味しています。

「中東」という表現は、イギリス人による「ミドル・イースト(Middle East＝中東)」からきています。中世イギリスではインドや中国を指して「イースト(East＝東洋)」と呼んでいました。イギリスは早くからアジアの植民地支配を目論んでいました。特に17世紀以降、産業革命を成し遂げたイギリスがインドや中国に支配の伸ばしたのは、そこが香辛料とお茶の主要生産地だったからで、そのため中継地として現在の中東地域の支配が必要だったのです。その結果、現在起きているパレスチナ問題や一連の紛争の大きな要因の一つになったのですが、その話は別の機会にしましょう。

そういったわけで、イースト(東洋)がインドを中心とした東南アジアだとすれば、イーストから西のヨーロッパとの中間に位置する地域はミドル・イースト(中東)ということになります。そこで、「中東」という言葉が出てきました。

(篠井純四郎)